

攻撃的サッカーがもたらすサッカー観戦文化の深まり

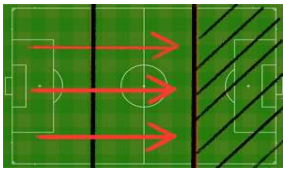
研究の動機・目的 2018年、圧倒的な攻撃力でJ1への昇格を果たした名古屋グランパス。J1でもその攻撃力を遺憾なく発揮したものの、失点も多く順位は低迷した。攻撃的サッカーは多くのファンを魅了し、サッカー観戦文化を大いに発展させるものと考えるが、勝利には攻防のバランスが重要であり、攻撃的サッカーが必ずしも勝利につながるとは言えない。そこで本研究では、「攻撃的サッカー」で「勝利」を掴むための「守備」の課題を明らかにすることで、サッカーの奥深さへの気づきを促し、サポーターにより多くの観戦の喜びをもたらすことを目的にする。

研究方法 2018年J1の上位3チーム、川崎フロンターレ（以下川崎F：1位）、サンフレッチェ広島（S広島：2位）、鹿島アントラーズ（鹿島A：3位）と名古屋グランパス（名古屋G：15位）を2018年J1 チームデータ、J1選手データ分析し、名古屋Gの攻撃力の高さ明らかにするとともに低迷の原因を探る。

攻撃面では次の4項目

- チーム総得点
- シュートの質を評価する指標として「被シュートブロック率」
- 突破力の指標として「被ファウル数」
- 組織力の指標として「交代してから得点」と「ディフェンダーのアタッキングサードでのプレー」

防御面では主に、被シュート数とラストパスについて分析する。



赤矢印の攻撃方向に対して黒斜線部分がアタッキングサードエリア

研究結果

2017年 (J2)

2017年名古屋Gの主な成績は以下のとおり。
○総得点85点（リーグ1位）（図1）
○被ファウル数452（同1位）○失点（同16位）

図1から、圧倒的な得点力が分かる。しかし、失点も多く、入れ替え戦にてJ1へ昇格した。表1から、名古屋Gは、アタッキングサード、ディフェンシブサードでのプレイタイムが少なく、自陣深く攻め込まれていない様子が分かる。

表1 2017 J2 名古屋GDFのアタッキングサードでのプレータイム(分)

	最長	名古屋G	Av
アタッキングサード	1796	478 (22チーム中20位)	1072.3
ディフェンシブサード	4515	1970 (22チーム中20位)	3229.2

2017J2各チーム総得点分布

図1 2017年J2チーム総得点

攻撃

2018年 (J1)

守備

表2 得点数

得点(点)				
川崎F	名古屋G	鹿島A	S広島	平均
57	52	50	47	45

○表1より1位と遜色のない得点力がある。

表3 失点数

失点(点)				
川崎F	S広島	鹿島A	平均	名古屋G
27	35	39	45	59

○表2より全チームの中で最も多く失点をしている

名古屋Gのシュート数

図2 シュート数

名古屋Gの被ファウル数

図3 被ファウル数

名古屋Gの被シュートブロック率

図4 被シュートブロック率

交代からの得点と速さ

図5 交代からの得点と速さ

名古屋Gのラストパス割合

図6 被シュート数

被ラストパスの割合

図7 被ラストパスの割合

被クロス数と空中戦勝利率

図8 被クロス数と空中戦勝利率

被クロス成功率

図9 被クロス成功率

○図2、4より、名古屋Gは、シュート数は上位・平均よりも少ないものの、精度の高いシュートが打たれていることが分かる。

○図3より、名古屋Gは、多くのファウルを受けており、相手チームが突破を警戒していることが伺える。サッカーでは、攻撃チャンスをつぶすためにファウルギリギリのプレーが行われることは多い。シュート数の減少にかかっているものと思われる。

○図5には交代後15分以内に得点したケースを比較した。名古屋Gは、交代後15分以内に得点することが多く、また交代してから得点するまでも早い。ベンチの得点力の高さが伺える。

表4にDFのアタッキングサードとディフェンシブサードでのプレータイムを示した。以下の点に注目したい。

- 名古屋GのDFは上位3チームと同等に敵陣深くまで攻め込み、積極的に攻撃に参加している。（パスの精度を調べてもトップ3に入るほど攻撃の質は高い。）
- ディフェンシブサードでのプレータイムが長い（リーグ1位）。DFに大きな負担がかかっていることが考えられる。

考察 名古屋Gの攻撃力の高さは上位3チームに全く引けを取らず得点能力も十分にある。J2在籍時より失点は多かったが、「とられるより多くとる」力技で勝利を収めてきた。J2ではその攻撃力の高さで自陣深く攻め込まれる時間帯も少なくDFの負担は大きくなかったものと考えられる。しかし、J1での戦いを見ると、DFが攻撃に積極的に参加するようになり、数的優位性をとりながら攻撃的サッカーを展開しているものの、攻め込まれる時間帯が長くなり、DFに大きな負担がかかったものと考えられる。カテゴリーが上がり、相手チームの攻撃力が上がったことで、その弱点を補いきれなくなったと言える。攻撃的サッカーを維持しながら、勝利へつなげるためには、失点に直結するDFの強化が最優先となる。また、自陣に攻め込まれないような戦術が望まれる。限られたDFメンバーで戦うためには、攻めると同時に攻められる場面についての工夫が重要であると言える。観戦時にはとかく攻撃に目が奪われがちだが、如何に守るかの視点が加わればもっと深い観戦の喜びが得られるはずである。

表4 2018 J1 DFのエリア別プレータイム

	1位	2位	3位	4位	5位	Av		
アタッキングサード	川崎F	浦和R	名古屋	鹿島A	V仙台		S広島 (7位)	
プレータイム(分)	1742	1592	1349	1268	1245	1092.3	1155	
敵陣ペナルティエリア内	湘南B	浦和R	鹿島A	V仙台	川崎F		名古屋 (6位)	S広島 (7位)
プレータイム(分)	172	159	155	151	148	111.2	132	126
ディフェンシブサード	名古屋	柏L	浦和R	G大阪	鹿島A		S広島 (10位)	川崎F (18位)
プレータイム(分)	3637	3548	3419	3248	3024	2772.6	2818	2073

今後の展望 2020年のJ1リーグにおいて、見事名古屋Gは3位の成績を収めた。名古屋Gがどのように弱点を補強しJ1を戦い抜いたのかを分析したい。

謝辞 データを提供して頂き、貴重な機会を与えてくださった情報・システム研究機構 統計数理研究所 医療健康データ科学研究センター様、データスタジアム 株式会社様に深く感謝申し上げます。